

1

等分

着地

追放

2

様式

世界

小皿

ウ

目が見
一時的

本当のこと

父さんたち

5
⑤

ア

⑥
エ

⑦
イ

⑧
うそ

⑨
D

8
失明

9
ウ

3

1
ことば

2
②
イ

④
ア

⑥
ウ

3
相手の反応

4
A
イ
B
ウ
C
エ
D
オ
E
工

(4 完 答)

5
I
自分の意図

5
II
やりとり

6
可能性

7
多義的なことば

8
ウ

| 配点 | |
|----------|---------------|
| 1 | 各2点× 6 = 12点 |
| 2・3 | 各4点× 22 = 88点 |
| 〈計〉 100点 | |

- 1 「等分」は『等』しい分量に『分』けること」という意味である。
- 2 「着」の四画目と七画目を続けて書かないように気をつけよう。
- 3 「放」の「のぶん」の画数は四画である。二画目から三画目にかけてを続けて書かないようにしよう。
- 4 「様」は十画目に注意しよう。縦の画をつらぬくように書こう。
- 5 「世」の二画目から四画目の順番はしつかりおぼえよう。縦↓縦↓横、である。
- 6 「皿」の最後の画は左右、どちらにも出すように書こう。

2

- 1 線①の三行前にあるように「これで大丈夫。もう心配はいらない」と思っていたのに、「息子が『目が見えない』と言っている」と告げられたのである。加子に対して「きつと一時的なもんだ」とはげましていること、新に同意を求めていることもおさえよう。
- 2 直前での父からの「新、新もそう思うだろ」という発言に対して「そうに決まっている」と思っているので、ここでの父と母のやりとりから考えよう。(Ⅱ)を「頭を打ったから」にすると、そもそも直後の表現とうまくつながらないし、——線②の直後の「そうでなければダメだ。そうであってほしい」と合わない。「目が見えないままではこまる」ということである。
- 3 このあとの朔の発言をていねいにたどっていくと「医者がなんて言ったか、ちゃんと教えて」「ちゃんと本当のことが知りたい」「頼む」となっている。
- 4 ④の直後の「そういうのはいいんだ。ちゃんと本当のことが知りたい」から、④には「朔のことを考えたようなきれいいごと」というような内容がはいることとなる。文章の後半にある「——医者がなんて言ったか、ちゃんと教えて」「——父さんたちはいいことしか言わないから」は、新が朔に言われたことを思い出している部分である。
- 5 (⑤)は息子の朔の病状について説明を受けている場面であり、ア・イ・エのどれもはいりそうなので、あとまわしにしよう。(⑥)は直前で「でしたら可能性はあるんですね!」と暗い話の中にも明るいきざしが見えていることから「身を乗り出した」がふさわしいだろう。(⑦)は直前で医者から「今後は将来見えないと考えて、生活設計をされたほうがいい」とはつきり言われてしまっているの、「わつと泣き崩れた」がふさわしいだろう。よって(⑤)は「修二の腕を握った」となる。
- 6 医者に「視力が回復する可能性はほとんどない」と言われたにもかかわらず、父が「朔に)もし聞かれたら、治療は、少し長くかかるみたいだけど大丈夫だからって(答えるように)」と⑧につくのかよ」と発言したのである。
- 7 問6とも関連するが、医者が「視力が回復する可能性はほとんどない」とはつきり言っているものを選ぼう。くく線Aはそこまではつきりとは言っていない。
- 8 ⑩の前の父の発言から、朔の視力が回復する可能性が低いことを受け入れられていないことが読み取れる。「目が見えないまま」という意味の二字のことばをいれよう。
- 9 この場面で父が新に「戻ってから父さんが話す。もし聞かれたら、治療は、少し長くかかるみたいだけど大丈夫だからって」「朔には、大丈夫だって。詳しいことは父さんから話すから」と念押ししていることから考えよう。

3

- 1 話すときは「会話」で、書くときは「文章」で相手に考えを伝えるわけだが、それはもちろん「ことば」によってである。
- 2 話すことと書くことには共通することがあるということ、話すときと書くときに該当する部分があるということは自然な流れなので、(②)には、「したがって」がはいる。「頭が赤い魚を食べた猫」だと「頭が赤い」のは「魚」とも「猫」ともとれるので、(④)には「また」がはいる。「いいのかもしれない」のあとで、「多義的だと感じられ」たというように、例外を述べているので、(⑥)には「ただ」がはいる。
- 3 四行後に「文章を書く場合、読者がどう反応しているかは、まったく分かりません」とあるので、「読者の反応」に近い意味のことばをさがそう。
- 4 「赤色の猫」を念頭に置くのだから、赤いのは「猫」になるように考えていきたい。そうするとCとEにはいるのは「猫」になるだろう。
- 5 ——線⑤より前の部分から、話しことばなら、意図することと違うとらえられ方をしたときに、話すことで修正することができが、書きことばではそういうやりとりができない、ということが読み取れる。◎の一文にうまくあてはまるようにぬき出そう。
- 6 「人とことばをやりとりすると、ちょっとしたこと『つまずき』が生まれます」だと、『人』および『ことば』を、誰かとやりとりする」という意味に受け取られることがあるということである。
- 7 ——線⑧の直後に「筆者の意図しない、とんでもない意味に受け取る人が出てくるかもしれません」とあることから、いろいろな意味に受け取られてしまうのは、どういことばを使ったときかを考えよう。
- 8 「自分の意図と違う受け取り方」をしていないか確かめるにはどうするべきなのか。自分で考えているだけではそれはわからないだろう。直後の一文の「その人」が周りの誰かを指していることから考えられる。